



当町内会でもし  
仮に今、AKB48  
のように読者によ

る総選挙をすれば、センターに選ばれるのは、たぶん『こもりうた』を書いている訶梨帝母姉御でしょう。当誌は、若いママたちやマダムらがランチやお茶をする、ちょっとお洒落なカフェにも置かせてもらっています。先日も、小さなお孫さんをもつマダムが、「GWに娘が帰ってきたら初月号から読ませてやりますわ」と私に告げ、まったりと午後の黄昏を楽しんでおられました。そんな人気の彼女にあやかって、私も今月は、「子育て」のお話です…

現在は日本を代表する観光地、京都の東山一帯。現在は特に外国からの観光客で年中賑わっていますが、<sup>あべのせいめい</sup>阿倍清明や<sup>おののこまち</sup>小野小町の祖父と言われている<sup>おのたかむら</sup>小野篁が活躍していた平安時代は、鴨川が三途の川であり、それを渡った東山は死者を弔<sup>のべち</sup>う野辺地だったそうです。清水寺から坂を下り東山通りを渡り、更に坂を下り松原通り大和大路手前に<sup>ろくどうちんのうじ</sup>六道珍皇寺があります。野辺の入り口にあるこのお寺には「<sup>めいどかよ</sup>冥途通いの井戸」と「<sup>よみ</sup>黄泉がえりの井戸」があり、小野篁はこの井戸を使って閻魔大王の手伝いをしにあの世とこの世を行ったり来たりしていたそうです。この寺の門を更に数10m下ると、『みなとや幽霊子育飴本舗』の看板が目に入ります。



「関ヶ原の合戦」の頃のお話です。もう数日で出産という女性が急死しました。坊さんを連

れて野辺地へ行き、引導を渡してもらい彼女を埋葬しました。数日するとその飴本舗に毎日夜更けに一人の女性が飴を買いに来ました。不思議に思い後をつけていくと、その埋葬した土の中から赤ん坊の泣き声が聞こえてきます。どうやら、彼女は土の中で出産していたようです。しかし、彼女は死んでいる身で乳が出ません。ですから飴を口でとかし、赤子の口へふくませていたようです。赤子は土から掘り出され無事成長し、後に尊き高僧になったという伝説があります。

ここを訪れた漫画家の水木茂さんは、この飴



の伝説を聞き、それをヒントに『墓場の鬼太郎』、『ゲゲの鬼太郎』が生まれたそうです。

先日、檀家の娘さんがN大学の仏文科に無事合格されたとの朗報を聞きました。そういえば、学生時代、私もフランス語を2年間習いました。習ったフランス語は全部忘れてしまいましたが、そのテキストが『赤ずきんちゃん』だったのは覚えています。ヨーロッパ諸国の赤ずきんちゃんは、狼に食べられて話は終わりです。「我が身は自分で責任を持って守りなさい」という、個人を重んじるお国柄なのでしょう。獵師に助け出される部分は後に日本で付け足したそうで、子育ては地域皆ですという、昔の良き日本の子育論なのでしょうか。「幽霊子育飴」、『赤ずきんちゃん』にしても、残酷で少し怖いストーリーがスパイスになっているところに、万国共通の、「子は宝である」を感じます。 俊徳丸